

王雪瑤（お茶の水女子大学大学院）

## 要旨

慣用句は意味拡張プロセスによって、構成要素の意味が慣用的な意味に寄与する分解可能なものと、構成要素の意味が直接に慣用的な意味に寄与しない分解不可能なものに分けられる。本研究は、日本語母語話者を対象者として、身体部位詞を含む慣用句を対象項目に、7段階尺度を用いた質問紙調査を行い、意味拡張プロセスが意味拡張の度合いに与える影響を考察した。

内省分析と実証的データを照合して分析した結果、意味拡張プロセスが慣用句の意味拡張の度合いに影響することが明らかになった。句レベルの意味拡張が発生する分解不可能な慣用句は語レベルの意味拡張が発生する分解可能な慣用句より、意味拡張の度合いが大きいことがわかった。

また、質的に分析したところ、慣用句の意味拡張の度合いは、構成要素とする身体部位における身体機能の典型性、構成要素の拡張義の抽象度、また、慣用句の文字通りの意味が表す行為の具現化にも関わることが明らかになった。

## 1. はじめに

慣用句は構成要素の意味が慣用的な意味に寄与するものと構成要素が直接には慣用的な意味に寄与しないものに分けられる。前者は分解可能な慣用句とし、後者は分解不可能な慣用句とする（Nunberg et al 1994, 有菌 2007b）。分解可能な慣用句は、例えば「口を出す」という慣用句が挙げられる。「口を出す」の慣用的な意味<意見を言う>は、「口」が<意見>、「出す」が<提示する>という意味を表す。分解不可能な慣用句は、例えば「口を開く」と「口を閉ざす」が挙げられる。この2つの慣用句は、<口の開閉>という口の動きが慣用的な意味の表す行為の<発言する>ことや<沈黙を守る>ことと時間的に隣接しており、その隣接関係によって表現全体の意味が拡張して慣用的な意味を表す。

近年、このような日本語の慣用表現、特に身体部位詞を含む慣用句に関して、構成要素の意味と文字通りの意味から慣用的な意味へ転じるプロセス、いわゆる意味拡張プロセスを検討する研究が盛んになっており（有菌 2013, 呉 2020 など）、このプロセスは慣用句の構成要素の意味、文字通りの意味、慣用的な意味の間の関連性を示す意味拡張の度合いにも反映する（有菌 2007b）。しかしながら、これらの研究は研究者一人ひとりの内省分析による考察に頼る場合がほとんどで、実証的研究は稀である。これらの内省分析の結果がはたして意味拡張の度合いを反映しているか、実証的研究を通して検討する必要もある。

そこで、本研究は、身体部位詞を含む慣用句を対象項目にし、日本語母語話者を対象者として、慣用句の意味拡張の度合いを明らかにする。その上で、意味拡張プロセスが意味拡張の度合いを反映するかを検討し、意味拡張の視点から日本語慣用句の特徴を考察する。

## 2. 先行研究

慣用句の意味拡張に関するいくつかの概念が存在する。構成要素の意味に着眼点を置いた「構成要素の比喩性」（伊藤 1999）、「構成性」（Gibbs & Nayak 1989, 陳 2018b）、などの用語もあれば、慣用句の文字通りの意味に着眼点を置いた「慣用句の具象性」（伊藤 1999）、「イディオム性」（伊藤 1999, 陳 2016）、「透明度」（Ishida 2009, 陳 2016）、などの用語もある。王（2022）は、慣用的な意味の成立を

支える動機づけは比喻であるゆえに、認知言語学の考えを援用して各用語を統一し、「意味拡張」という用語を用いた。構成要素の意味の拡張を「語レベルの意味拡張」、句全体の文字通りの意味の拡張を「句レベルの意味拡張」とし、慣用句の意味拡張プロセスは構成要素の「語レベルの意味拡張」と句全体の「句レベルの意味拡張」に分けられた。また、「1. はじめに」で言及したように、慣用句は意味拡張プロセスによって分解可能なものと分解不可能なものに分けられ、分解可能な慣用句は「語レベルの意味拡張」が慣用的な意味に寄与し、分解不可能な慣用句は「句レベルの意味拡張」が慣用的な意味に寄与する。

有菌（2007b）は、取り立て詞を付加するなどの文法操作を適用するという手法で慣用句のイディオム性を考察した。適用する文法操作の数が多ければ多いほど、イディオム性が低いとされる。その結果、分解可能な慣用表現は分解不可能な慣用表現よりイディオム性が低いことがわかった。つまり、構成要素の意味が拡張する慣用表現は句の文字通りの意味が拡張する慣用表現より意味拡張の度合いが小さいと考えられる。その理由について、有菌（2009）は、分解不可能な慣用表現は、構成要素同士が連結した形で句全体の意味が拡張し、慣用的な意味が成立しているため、必然的に構成要素同士の結びつきが強く、個々の構成要素の意味が拡張した分解可能な慣用表現よりもイディオム性の程度が高いと指摘した。王（2022）も有菌（2007b）と同じ結果を示し、「句レベルの意味拡張」が関与する慣用句は「語レベルの意味拡張」が関与する慣用句より意味拡張の度合いが大きいと判断される傾向が見られた。

これらの先行研究は、慣用句の意味拡張の度合いが意味拡張プロセスによって異なる可能性を示したが、研究者一人の内省分析によるもので、考察には限界がある。実証的データを収集した上で、内省分析と照合して検討するのが望ましいが、日本語の慣用句の意味拡張の度合いを実証的に考察した先行研究は限られている。その一方で、意味拡張と類似の概念である「透明度」の度合いを考察したものはある。

陳（2016, 2018a）は、日本語慣用句の透明度について量的調査を行った。調査をする際、対象者には慣用句が表す文字通りの意味と慣用的な意味が提示され、その間の関連性を5段階尺度また7段階尺度で判断してもらった。しかしながら、慣用句は必ずしも慣用句全体の文字通りの意味から拡張するものではなく、慣用句の一部である構成要素から拡張するものもある。王（2022）は、対象者が透明度を判断する際に、「文字通りの意味」と「慣用的な意味」だけが提示されれば、対象者は「語レベルの意味拡張」と「句レベルの意味拡張」を区別せず、全て「句レベルの意味拡張」として認識すると述べている。その場合、「語レベルの意味拡張」を見落とししたり、「語レベルの意味拡張」と「句レベルの意味拡張」を混同したりする恐れがある。そのため、構成要素の意味と句の文字通りの意味を分け、両方を提示したほうが、より正確に意味拡張の度合いを判断することができると考えられる。

### 3. 研究課題

以上の先行研究を踏まえ、本研究はまず日本語母語話者を対象者とし、慣用句に関わる意味（構成要素の意味、句全体の文字通りの意味、慣用的な意味）を全て提示した上で、7段階尺度で慣用句の意味拡張の度合いを判断してもらおう。その上で、慣用句の意味拡張の度合いは意味拡張プロセスによって異なるか、を研究課題とし、意味拡張プロセスは慣用句の意味拡張の度合いを反映するかを検討する。

### 4. 研究方法

#### 4.1 対象項目

対象項目は鐘（2012）と陳（2016, 2018a）を参考にする。鐘は、辞書に載る語義をもとに、日中両言語における身体部位詞に関する慣用表現の対照研究を行い、『日中両言語における体言語に関する慣用

表現対照一覧』を付録に収録した。本研究はまず、先行研究に挙げた陳（2016, 2018a）の付録にある慣用句リストから、身体部位詞を含む慣用句を対象項目として選出した。また、鐘（2012）の付録リストを主に、『三省堂故事ことわざ・慣用句辞典』（三省堂）と『例解 慣用句辞典一言いたい内容から逆引きできる』（創拓社）も参照した。選出する際には、句義が2つあるような慣用句を排除し、最終的に100句の動詞慣用句を選出した。なお、調査実施中、調査紙に不備が発覚した4句を除外し、最終的に96句の慣用句を対象項目にした。

#### 4.2 調査対象者

調査対象者は98名で、全員日本語母語話者である（学生・院生59名、社会人38名、未記入1名）。年齢範囲は19歳から74歳までで、年代別に記入した3名と未記入の3名を除き、平均年齢は27.24歳である。

#### 4.3 質問紙の作成

本調査は7段階尺度の質問紙を用いて行い、質問紙は質問紙Aと質問紙Bの2つに分けた。

質問紙を作成する際に、陳（2016, 2018a）から選出した対象項目は透明度の高いものと透明度の低いものをなるべく均等に分けて2つの調査紙に配置したほか、(1)名詞部に同じ身体部位詞を用いるが、動詞部は自動詞・他動詞に対応する慣用句（例：「口を出す」と「口に出る」）、(2)名詞部に同じ身体部位詞を用いるが、動詞部は辞書形・使役形に対応する慣用句（例：「目が光る」と「目を光らせる」）、(3)名詞部は異なる身体部位詞を用いるが、動詞部は同じ動詞を用いる慣用句（例：「目を疑う」と「耳を疑う」）、(4)名詞部と動詞部は同じ身体部位詞と動詞を用いるが、助詞が異なる慣用句（例：「手を入れる」と「手に入れる」）を、なるべく異なる質問紙に配置するようにした。

また、1つ調査紙のうち、(1)名詞部が同じ身体部位詞を用いる慣用句（例：「手を出す」と「手を貸す」）、(2)動詞部が同じ漢字を用いる慣用句（例：「足を出す」と「顔に出る」）、(3)類似した意味を示す慣用句（例：「目が届く」と「目が光らせる」）を、なるべく連続しないように配慮した。

各対象項目の提示例を図1に示す。

くら  
目が眩む：欲望などにとらわれて分別がなくなる

- |                          |                           |
|--------------------------|---------------------------|
| <input type="checkbox"/> | 目： 物を見るための器官、視覚器官         |
| <input type="checkbox"/> | 眩む： 強い光を突然受けて、目が見えなくなる    |
| <input type="checkbox"/> | 結合： 視覚器官が強い光を突然受けて、見えなくなる |

「✓」を入れた意味と慣用的な意味の間の距離

関連性が非常に低い 1・2・3・4・5・6・7 関連性が非常に高い

図1. 慣用句の提示例

各慣用句の動詞部は漢字とひらがなを併記した。意味は句の慣用的な意味のほか、各構成要素が結合した句全体の文字通りの意味を提示した。各構成要素の意味は『スーパー大辞林 3.0』、『新明解国語辞典 第七版』を参考にし、それらの中心義を分かりやすく示した。その意味の下に、7段階尺度を配置した。また、分析には用いないが、調査対象者が各慣用句の意味拡張プロセスをどのように捉えるかを把

握するため、各意味の横にチェックボックスも設けた。「意味拡張の度合い」という用語は認知言語学に関わりを持っていない普通の母語話者には理解しにくいと考え、陳（2016, 2018a）に倣い、「関連性」という用語を用いた。関連性が低いほど意味拡張の度合いが大きく、関連性が高いほど意味拡張の度合いが小さい。調査対象者は意味が転じるものをチェックに入れ（最大3つ選択可）、それらの意味を合わせて慣用的な意味の間の関連性を7段階尺度で判断する。

#### 4.4 調査実施

本調査は2022年3月上旬から5月上旬にかけて行い、各対象者に調査紙Aか調査紙Bかを記入してもらった。各調査紙に外れ値になるようなデータを排除する基準とする対象項目を設けた。なお、本調査に入る前、練習用項目を6句設けた。

#### 4.5 分析方法

陳（2018a）の対象項目のうち、「目を凝らす」と「目に入る」はそれぞれ調査紙Aと調査紙Bにおいて、透明度が最も高く、かつ標準偏差が平均値以下のものである。この2句は意味拡張の度合いが小さく、7段階評価の評価点数が高いと予想される。そのため、7段階評価の評価点数の中央値4点以下の点数を選択した対象者、つまり、この2句を意味拡張の度合いが大きいと判断した対象者のデータを排除した。本調査は合計98名の調査対象者からデータを回収し、最終的な分析対象者は調査紙A45名、調査紙B43名となった。

本研究は、意味拡張プロセス（語レベルの意味拡張か句レベルの意味拡張か）を独立変数として、意味拡張の度合いを従属変数として、一元配置分散分析を行った。

### 5. 研究結果

調査紙Aと調査紙Bによる一元配置分散分析を行った結果、両群の得点の間は有意な差が認められなかった（ $F(1,94)=.272, p>.05, \eta^2=.003$ ）。したがって、調査紙Aと調査紙Bの得点に差がないことが確認できた。

表1は、意味拡張についての記述統計である。意味拡張の度合いの評価点数の平均値は4.37で、平均値以上のものは意味拡張の度合いが小さいとし、平均値以下のものは意味拡張の度合いが大きいとした。評価点数が高ければ高いほど、慣用句の構成要素か文字通りかの意味と慣用的な意味の間の関連性が高く、意味拡張の度合いが小さい。

表1. 意味拡張の記述統計

	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
語レベル	38	4.83	1.23	2.28	6.51
句レベル	58	4.07	.99	1.88	6.16
合計	96	4.37	1.15	1.88	6.51

意味拡張プロセスを要因として一元配置分散分析を行った結果、1%水準で有意な差が認められた（ $F(1,94)=11.003, p<.01, \eta^2=.105$ ）。つまり、語レベルの意味が拡張する分解可能な慣用句と句レベルの意味が拡張する分解不可能な慣用句の意味拡張の度合いには差がある。

## 6. 考察

上述したように、意味拡張プロセスの異なる慣用句の間には意味拡張の度合いに差があることがわかった。つまり、慣用句の意味拡張の度合いは意味拡張プロセスによって異なることが明らかになった。意味拡張プロセスは意味拡張の度合いを反映し、句レベルの意味拡張が発生する分解不可能な慣用句は語レベルの意味拡張が発生する分解可能な慣用句より、意味拡張の度合いが大きいと考えられる。

意味拡張の度合いが小さい対象項目と大きい対象項目に分け、質的に検討していく。表 2 は対象項目の中、意味拡張の度合いが最も小さい 10 句と大きい 10 句をまとめたものである。

表 2. 質的に検討する対象項目（度合いが小さい順）

意味拡張の度合いが最も小さい対象項目			意味拡張の度合いが最も大きい対象項目		
対象項目	プロセス	平均	対象項目	プロセス	平均
目を背ける	語	6.51	足を出す	句	2.76
目を凝らす	語	6.49	腹を割る	句	2.73
目を疑う	語	6.29	手を抜く	語	2.72
目を逸らす	語	6.26	頭に来る	句	2.69
目が留まる	語	6.26	肩を叩く	句	2.62
口を封じる	句	6.16	鼻に付く	句	2.60
耳に残る	語	6.02	顔を立てる	語	2.47
耳を疑う	語	5.98	腹が出来る	語	2.37
目に入る	語	5.95	手を焼く	語	2.28
耳を塞ぐ	句	5.93	腹が立つ	句	1.88

意味拡張の度合いが最も小さい 10 句の対象項目の中、語レベルの意味拡張が発生する分解可能な慣用句は 8 句あり、大半以上を占める。この結果は、意味拡張プロセスが意味拡張の度合いに影響することに対して十分な裏付けを示している。分解可能な慣用句は、構成要素の意味が慣用的な意味に寄与することで、双方の意味は直結しているため、意味拡張の度合いが小さいと判断される。構成要素の身体部位詞から見れば、これらの慣用句は構成要素とする身体部位詞は「目」、「口」、「耳」で、全て知覚を司るものである。その中、「目」を構成要素とする慣用句は 6 句あり、半分以上を占める。これらの身体器官は、視覚行為、摂食行為・発話行為、聴覚行為など、日常生活に欠かせないものであり、使用頻度の高い典型的機能を持つものである。そのため、これらの身体器官とその機能は際立ちが高いとも言える。身体部位詞を含む日本語慣用句を計量的に分析した先行研究は、いずれも「目」が最も構成要素として使われる身体部位であると示している（支・吉田 2002, 沖 2004, 李 2009）。「目」を道具とした行為は視覚行為しかなく、機能が極めて限定され、際立ちが最も高い身体部位とも言えよう。このような分解可能な慣用句は構成要素とする身体部位が典型的機能を持ち、かつ、語の意味が慣用的な意味に直結しているため、意味拡張の度合いが小さい。

意味拡張の度合いが最も大きい 10 句の対象項目の中、句レベルの意味拡張が発生する分解不可能な慣用句は 6 句あり、半分以上を占める。分解不可能な慣用句は、構成要素を組み合わせた文字通りの意味が慣用的な意味に寄与するため、構成要素と文字通りの意味を全て処理してからはじめて慣用的な意味を導き出すことができる。そのプロセスは分解可能な慣用句より複雑であるゆえ、意味拡張の度合いが大きいと判断される。構成要素の身体部位詞から見れば、これらの慣用句は「腹」や「肩」など、典型的機能を持っていない身体部位詞を構成要素とする慣用句、また、「手」と「足」など、四肢部の身体

部位詞を構成要素とする慣用句があることがわかった。これらの身体部位は、意味拡張の度合いが小さい対象項目に構成要素とする身体部位より、身体機能の典型性が低く、あるいは特定できないものである。「鼻に付く」のような際立ちがより高い身体部位を構成要素とするものもあるが、身体部位の典型的機能は慣用句の慣用的な意味に関係しないため、典型的機能を喚起しても意味拡張に役に立たない。このような分解不可能な慣用句は構成要素とする身体部位の典型的機能を喚起しにくく、かつ、意味処理がより複雑であるため、意味拡張の度合いが大きいと考えられる。

以上の分析により、身体部位詞を含む慣用句の意味拡張の度合いは、構成要素とする身体部位に深く関与することがわかった。典型的機能を持ち、際立ちが高い身体部位は話者にとって馴染みがあるため、このような身体部位詞を含む慣用句は意味拡張の度合いが比較的小さいと考えられる。

引き続き、分解不可能にも関わらず意味拡張が小さい対象項目と、分解可能にも関わらず意味拡張が大きい対象項目を分析する。

意味拡張が小さい分解不可能な対象項目は、「口を封じる」と「耳を塞ぐ」である。この2句は分解不可能でありながら、意味拡張が小さかった。これらの慣用句は文字通りの意味を表す行為として具現化しやすいものである。また、「口」や「耳」を封じ、塞いだことで、それらの身体器官の機能が停止し、この動き自体は慣用的な意味に直結している。このような慣用句は文字通りの意味から慣用的な意味に拡張するが、文字通りの意味が具現化しやすい行為で、また、その行為から慣用的な意味に連想しやすいため、意味拡張の度合いが小さいと考えられる。

意味拡張の度合いが大きい分解可能な対象項目は「手を抜く」、「顔を立てる」、「腹が出来る」、「手を焼く」である。この4つの慣用句における身体部位詞の意味は以下のように拡張している。

- |           |        |           |        |
|-----------|--------|-----------|--------|
| (1)手を抜く：  | 手 → 労力 | (3)腹が出来る： | 腹 → 覚悟 |
| (2)顔を立てる： | 顔 → 名誉 | (4)手を焼く：  | 手 → 労力 |

これらの拡張義は、身体部位を道具として使う行為にかかる「労力」に拡張するものもあれば（有菌 2022）、身体における重要性によって「名誉」に拡張するものや（有菌 2008）、身体部位に収める本心を確固としたものにする「覚悟」に拡張するものもある。これらの意味はいずれも抽象的なものであるため、意味拡張の度合いが大きいと考えられる。また、「顔を立てる」と「腹が出来る」のような慣用句は、文字通りの意味を表す行為も具現化しにくい行為で、その行為から慣用的な意味に連想しにくいいため、意味拡張の度合いが大きい。また、五官と比較したら、「手」は多様な行為ができるため、機能が特定しにくい。「顔」は器官としての典型性が低いため、機能が喚起しにくい。「腹」は消化機能を喚起する可能性があるが、拡張義の「覚悟」に直結していないため、意味拡張の度合いが大きい。

## 7. おわりに

本研究は内省分析と実証的データを照合し、慣用句の意味拡張の度合いは意味拡張プロセスに影響されることを明らかにした。句レベルの意味拡張が発生する分解不可能な慣用句は語レベルの意味拡張が発生する分解可能な慣用句より、意味拡張の度合いが大きいことがわかった。

しかしながら、質的な分析より、身体部位詞を含む慣用句の意味拡張の度合いは、構成要素とする身体部位における身体機能の典型性、構成要素の拡張義の抽象度、また、慣用句の文字通りの意味が表す行為の具現化にも関わる。これらの要因はいかに慣用句の意味拡張の度合いに影響を与えるかについて、さらに検討する余地があり、それを今後の課題にしたい。

## 参考文献

- 有菌智美 (2007a) 「「頭」「胸」「腹」—精神活動の在り処としての身体部位詞—」『日本認知言語学会大会論文集』7, 310-320.
- 有菌智美 (2007b) 「身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の統語的凍結性」『言葉と文化』8, 139-156.
- 有菌智美 (2008) 「「顔」の意味拡張に対する認知的考察」『言葉と文化』9, 287-301.
- 有菌智美 (2009) 「身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究」名古屋大学博士(文学)学位請求論文
- 有菌智美 (2013) 「行為のフレームに基づく「目」, 「耳」, 「鼻」の意味拡張—知覚行為から高次認識行為へ—」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』25(1), 123-141.
- 有菌智美 (2022) 「述語的な慣用的連結句から見た日本語身体部位詞とフレーム」松本曜・小原京子(編)『フレーム意味論の貢献—動詞とその周辺』開拓社 150-171.
- 伊藤眞 (1999) 「慣用句の意味の成立要因について」『Rhodus : Zeitschrift für Germanistik』15, 185-197.
- 王雪瑤 (2022) 「慣用句の意味推測における透明度要因に関する一考察—身体部位詞を含む慣用句を例として—」『人間文化創成科学論叢』24, 1-10.
- 沖裕子 (2004) 「日本語の身体慣用句一覧」『信大日本語教育研究』4, 33-85.
- 呉琳 (2020) 「日中慣用句における「手」の意味拡張」『日中語彙研究』9, 53-65.
- 支洪濤・吉田則夫 (2002) 「身体部位名称を含む慣用句についての計量的分析—中国語との対照を通して—」『岡山大学教育学部研究集録』121, 157-165.
- 鐘倩 (2012) 「日中両言語における体言語に関する慣用表現の対照研究」関西外国語大学博士(言語文化)学位請求論文
- 陳雯 (2016) 「慣用句の透明度と親密度の関係について—日本語母語話者と学習者判断の比較から—」『筑波応用言語学研究』23, 15-30.
- 陳雯 (2018a) 「日本語慣用句の記述的規範—300個の動詞慣用句の親密度・透明度・予測性—」『言語学論叢 オンライン版』11, 20-45.
- 陳雯 (2018b) 「慣用句の産出と理解に関わる諸要因—日本語学習者と日本語母語話者の比較を通して—」筑波大学博士(言語学)学位請求論文
- Gibbs, R. W., Nayak, N. P. & Cutting, C. (1989) How to kick the bucket and not decompose: Analyzability and idiom processing. *Journal of Memory and Language*, 28(5), 576-593.
- Ishida, P. (2009) The effect of transparency on L2 idiom interpretation. *Tsukuba journal of applied linguistics*, 16, 15-30.
- Nunberg, G., Sag, I. A., & Wasow, T. (1994). Idioms. *Language*, 70(3), 491-538.
- 李晶 (2005) 「身体词汇惯用语的中日对比研究」『日语学习与研究』増刊2, 48-52.(李晶 2005 「身体語彙慣用句の日中対照研究」『日本語学習と研究』増刊2, 48-52.)